ゴジラ好きなのでパーティーをそれっぽくしてみた

チキン大福

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

特撮好きの大学生がポケットモンスターの世界に転生し、それに関してある程度の知識しかない主人公が自分の趣味を生かしてエンジョイするお話。

目　次

がっずぃーら（ＧＯＤＺＩＬＬＡ）？※バンギラスです　――――――　1
怪獣王はつおい　※バンギラスですＰａｒｔ２　――――――　6
守護神（モスラ）？※ウルガモスです　11
伏して拝むがいい黄金の終焉を（キングギドラ）※サザンドラです　――――　15

がっずいーら（ＧＯＤＺＩＬＬＡ）？※バンギラスです

諸君、俺は大の特撮好きである。中でも好きなのは「ゴジラ」と言った作品で１９５４年に大ヒットした怪獣映画だ。俺は幼い身でありながらもゴジラの破壊ぶりに刺激を受けてしまった。それだけではなくゴジラに襲い掛かる数多の怪獣達とのバトル。これほど鳥肌の立つ作品が他にあるだろうか俺のゴジラ好きは幼少期では飽き足らず、大学生までゴジラを愛し続けていた。しかも今度の映画は昭和にヒットした「ゴジラＶＳキングコング」その令和版が公開決定されたのだ。これは公開までワクワクが止まらず、バイトでためていたお金でフィギュアを買おうとしたその時に俺の運命は変わってしまった。

事故ってしまったのだ。そして「めのまえが　まっくらに　なった」と言わんばかり意識を失ってしまった。漸く、最新作が見れると思ったのにこんなことってある？と萎える暇なんてなかった。

しかし、何の因果なのか、俺は知らない天井をいつの間にか見つめていた。これはもしや「転生と言う奴なのでは？可能性があるとすればゴジラの世界がいい」と希望を胸

にするが、それは直ぐに打ち砕かれてしまった。
なぜなら、そこに映っていたのは不思議な生き物同士が戦い、それらを指示する人たちと赤白のボール。見た瞬間俺には見覚えがあった。

――――あっ、ここポケモンの世界じゃん

ポケモンに関してはある程度知識はあった。少しやっていた時期があって第四世代くらいだったか?ラスボスまで倒して飽きてしまい暫くはやらなかった。ずっとゴジラの映画ばかりみていたからな。

……その時だった。さっき俺は「ゴジラ」と言った。気づけば俺はある目標を決めていたのだ。

――――転生した世界がポケモンならば自分のパーティをゴジラシリーズっぽくしてみればいいではないか……と

第四世代しかやったことないのでその後のポケモンもどう進化しているのか興味を持ち始めた。決心した俺は早速ゴジラシリーズになり切れるポケモン探しの旅にでた。

とここまで話したのが約一年前。そして聞いてくれ!!俺はとうとうゴジラシリーズに見合うポケモン達を遂に手に入れたぞ!!それだけじゃない。性格も技も全てなんとか成り切りる事が出来ました!!後はポケモンバトルしまくって人生を謳歌するだけだぜ!!はっはっはっはっは!!

「それでは、決勝に出場される”エイジ”選手。フィールドの方へお願いします」

「アッ、ハイ」

係員の人にそう呼ばれて控室から出ていく。今俺は金稼ぎの為にバトル大会に出ている。因みになぜ金を稼いでいるのかと言うと前述で話した通り「わざマシン」やらを大量購入したせいで所持金が雀の涙程度しかないのだ。

そんな感じで俺は手持ちのポケモンで勝ち続けこうして決勝まで進んできた。そういえばここまで沢山バトって来たけど戦意喪失していたのは何故だろう?まぁ、そんなことは置いといて……ここで勝てば賞金１０万だぜ。グヘヘヘヘヘヘ……

おっと、悪い顔が出てしまった。さて決勝のお相手は今まで戦ってきたトレーナーの中で断然強いのは間違いない筈！

『さぁ、間もなく決勝が開始されます!!賞金を手にするのは誰か!このバトルで全てが決まります!!』

会場が凄い盛り上がってきてる中、俺はボールを手に取る。というかまだ”この子しかバトルさせてないんよね”とはいえ相手も強い筈だから”他の皆にも出番あるかもしれない”そう思いながら俺はモンスターボールをフィールド目掛けて投げる。

「いけ!!ゴジラ!!怪獣王の強さみせたれ!!!」

モンスターボールから白い光と共に現れたのは鎧を纏ったようなデザインで、怪獣を彷彿とさせる風貌が特徴的なポケモン。肌は緑色の岩のようにゴツゴツとしており、背中はいくつもの鋭い背ビレで覆われている。目つきは鋭く獰猛さを醸し出している。個体名「バンギラス」と世間では言われているが通常個体より二回り大きくみている観客を驚愕させる

「グガオオオオオオオオオオツツツンン!!!!!!!!」

――怪獣王進撃

怪獣王はつおい　※バンギラスですＰａｒｔ２

試合が熱狂の中、二体のポケモンが最後の決勝を繰り広げている。……というより”エイジ”のバンギラスが相手のポケモンを既に４タテしてしまったので圧倒しているとの方が正しいだろう。

「ギャラドス！戦闘不能！勝者バンギラス！」
「ちっ！ギャラドス戻れ！」
「ゴジラ！そのまま戦闘続行だ!!」

相手選手のポケモンが残り一匹となった。しかしエイジは油断大敵と気持ちを乗せて最後の勝負に出る。

「……っ！ジャラランガ!!」
最後に出てきたのは体中が鱗で覆われており、まるで黄金の飾りでも着飾っているよ

うな出で立ちのポケモンだった。
　てかあのポケモン見たことないな、見た目からドラゴンタイプと言ったところか？あっ、そうだ。こんな時こそこの地方で買った『スマホロトム』を使ってみるか

　取り出したのは第四世代時に幻ポケモン扱いしていたロトムがスマホの形となって出てきた。
　当初これ見て「えっ、幻ポケモンが遂に商品化してしまった時代なの？」とショックを受けた。
　これを販売している店員さんに聞いてみた所、前世でよく使ってた「ＨＥＹ　Ｓ○ｒ○」のように持ち主の要望に応えてくれるという。
　しかも写真や動画なども撮ってくれたり、自分で検索しなくても打ってくれるという超高性能ロトムと化した。よくよく、考えてみるとロトムって色んな電化製品に化ける事ができるのでそれを応用したんだと思う。
「ロトム、あのポケモンについて教えて」
　そう言うとロトムはすぐさま横画面になり、画面には目の前のポケモンについて情報が表示されている。
「ドラゴン・かくとうの複合タイプ!?そんなの俺初めて見たんだけど……」

知らない間にポケモンと言う作品は進化している。俺はこの時代の流れについてこれるのだろうかと不安に思ったが、”此奴ら”がいるから大丈夫だろと謎の安心感が出てくる。

「ジャラランガ、”きあいパンチ”!」

「ゴジラ”!.れいとうパンチ”」

パンチ系の技がぶつかり合う。しかもお互い力比べで勝れば効果抜群はほぼ確定だ。

「じゃ、ジャラ!?」
「グオオオオオオ!!!」

力は圧倒的にバンギラスの方が上で押し負けてしまうジャラランガ

「ジャラランガ!.態勢立て直して”ドラゴンクロー”!」
「隙を与えるな!.はかいこうせん”!」

ジャラランガはこおりタイプの攻撃を受けたものの何とか耐えきって次の攻撃に持ち掛けようとするものの、先にエイジのバンギラスが口から収縮されたエネルギーを一気に解き放った。

「まずい！ジャラランガ躱せ！」

「ジャ、ジャラ!?」

指示するタイミングが悪かった。ジャラランガは態勢を整え技を繰り出そうとしたときに相手のバンギラスの攻撃が入りそのまま避けろと言われるも自分は攻撃を繰り出そうとしていたのでトレーナーの指示通りには動けなかった。そして気づけば自分の視界には白い光が目の前まで迫ってきた。

エイジのバンギラスが放った通常の”はかいこうせん”とは比にならない程の威力で客観的に見てみると、それはまさに極太のレーザーと呼ぶのが正しいであろう。”はかいこうせん”を喰らってしまったジャラランガは察しの通りステージ場外まで吹っ飛ばされていた。

そして、試合終了の合図が鳴り響く。

「ジャラランガ！戦闘不能！勝者！バンギラス！よってこのバトルはエイジ選手の勝利！」

審判が判定を宣言し終えると観客席から歓喜の熱狂があふれ出る。試合に勝ったエイジは”ゴジラ”と共に喜びながら抱き合っていた。

守護神（モスラ）？※ウルガモスです

「ふぅ～、数が多くて時間かかるかと思ったけど、案外早く終わる説浮上してきた」
俺はモンスターボールを片手で握りながら呟く。
「ある程度知ってたは知ってたけどこんなところでも活動していたんだな」

「んんー!!んんー!!」
「な、何なんだよ!?あのポケモン！」
地面には黒をバックにした赤いＲのマークがシンボルのスーツを着込んだ男女何人かが両手両足・口が糸で縛られて混乱している。その他にもまだ、ポケモンを繰り出して戦闘態勢になっている人たちも見える。
世間的に彼ら彼女らは「ロケット団」と呼ばれカントー地方・ジョウト地方を拠点に暗躍する犯罪組織だ。別名ポケモンマフィアともいわれており世界征服を目論み、各地でポケモンを利用した悪事を働いていると言われている。とここまでは少しばかりア

ニメを見ていたからだが、ロケット団といえばあの「面白トリオ」はいないのかと聞いたが、そんな奴らうちの組織にはいないと返された。

「キュウーーッッ!!」

そんで俺の後ろにいる6枚の翅を持つ巨大な蛾のような姿をしたポケモンがロケット団を殺さんとばかりの瞳で見つめている。此奴はイッシュ地方で遭遇したメラルバから進化したウルガモスっていうポケモンなんだけど「モスラ」って呼んでる。なんでかって?見た目がそういってるからさ。このモスラって呼び名本人も気に入っている。

何故このような状況になったのかと言うと簡潔に纏めればキャンプしてたら其処等辺にうろついていたポケモンを乱獲していたからかな?他人が嫌がる事をしちゃいけないとういのをお母さんに習わなかったのかと冗談気味で言ったら襲い掛かってきたので返り討ちにしてこういった状況になったという訳さ。

「さて、粗方片づけたけど、これでもまだポケモンバトルしたいって人いる?」

２０人くらい活動していたのが一気に残り五人となっている。まぁ、これで降参してくれれば後々助かるんだけどな。

「わ、我々ロケット団を舐めるなよ!!」

「たかが一人で五人に勝てると思ってんのか!」

いやいや、元々２０人のお前らがたかが俺一人に勝てないってどういう事よ

「行け！アリアドス！」

「デルビル！つづけ！」

「ゴルダック”ハイドロポンプ”」

「ダーテング”はっぱカッター”」

「サワムラー”インファイト”」

まさにワルが持ってそうなポケモンを繰り出してきて各タイプのワザを放ってくる。ならばこっちも目に程見せてやる

「お前らこそうちの守護神舐めるなよ！モスラ”ぼうふう”」

「キュウウウウウウウーーーーーッッッッッ!!!!」

咆哮しながら６枚の翅が強く動かす。翅の動きに連動するように風が舞い辺りに生えている樹木が簡単に剥がれた。したっぱ共のポケモンが放った技は一瞬でかき消され、同時に捕まえていた他のしたっぱ達含め俺以外が叫喚しながら高く舞い上がってどこか遠い空のかなたまで飛んで行ってしまった。

「すげぇな」
「キュウー♥」
モスラはもふもふな体で懐いてくる
「あ”ぁぁぁぁ〜〜ぎもぢぃぃぃぃよ”ぉぉぉ〜」
癒されるわ〜

伏して拝むがいい黄金の終焉を(キングギドラ)※サザンドラです

ーワイルドエリアー

巨人の鏡池にてそれは居座っていた。全身が白でおおわれている頭から翼端までが一続きとなった全翼機のようなフォルムが特徴を持つポケモン。世間では「トゲキッス」と呼ばれており、見た目は天使のように見え、争いが起きている場所には決して近づかないと言われている。

だが、それは一部の人間が知っていることであって、このポケモンの恐ろしさはごく一部しか知らない事がある。

野生のドラゴンタイプポケモンでさえ近づけない。それはトゲキッス自体が「フェアリー・ひこうタイプ」という複合持ちでドラゴンタイプの技は一切通じない。彼らは分かっているのだ　挑んでしまったら最後「エアスラッシュ」で動きを止められ「マジカルシャイン」でとどめを刺されるというドラゴンポケモンを瞬殺するという正に天使の

皮を被った白い悪魔と呼んでも過言ではない。

もしもの話だが、例外がいるとしたら？

如何にフェアリータイプだろうが相性なんぞ関係ない　そんなドラゴンタイプのポケモンがいるとして、戦ったらどうなるのか？

トゲキッスの元へ一体の影が飛来してきた。それに感づいたトゲキッス自身も微笑みを浮かべながら戦闘態勢に入る。既に自分が勝ち確定だと決まったようなものだ。

飛来してきたのは両腕併せて３つの頭、背中には６枚の黒い翼が生え、蒼と黒の体、黒い目に紫の瞳を持つ多頭龍型ポケモン。その姿は「八岐大蛇（ヤマタノオロチ）」を想像させている。見た目の通り性格は凶暴で、動くものを敵と思い込んで襲いかかり、３つの頭で食らいつくす恐ろしい存在とされている。なお両腕の頭は脳みそを持たない。個体名を「サザンドラ」と呼ばれているポケモン。しかしそのサザンドラは通常個体より二回り大きく三メートル並みの体格を誇る。

両者が相まみえたところで先手を取ったのは素早さが高いトゲキッスだった。両翼

から「エアスラッシュ」を放つ。しかも特性が「てんのめぐみ」持ちであるため相手は必ず「ひるみ」状態になり、最終的に「ずっと俺のターン」へ移行する算段でいる。毎度この方法で数多のドラゴンポケモンを葬ってきたらしい。

「ドラァ」

サザンドラが動き出した。頭部の口・両腕の口からから黄色いエネルギーを収縮させて、一気に解き放った。「チャージビーム」と呼ばれるその技はそれぞれ三つの雷の光線と化し、放ってきたエアスラッシュをかき消してトゲキッスに命中した。

「と、トゲェェ!?」

これは予想外。まさかドラゴンタイプが電気タイプの技を持っていたなんて誰が想像できるだろうか？　飛行タイプ持ちのトゲキッスには効果抜群で真っ白な美しい身体がさっきの攻撃により少し黒ぎみてしまった。

倒れずに済んだものの、しかしそれでも効果抜群だった為、致命傷になりかねないダメージを負ってしまった。一方、向こうのサザンドラは隙なんぞ見せずに突っ込んでき

た。なんとか態勢を整えねばと空へ逃げよう離陸する。それを既に予期していたかのように次の行動を取った。

「ドラァ！」

相手(トゲキッス)が飛ぶ前にサザンドラは対象の真下つまり地面を盛り上げて尖った岩を形成させ攻撃したのだ。「ストーンエッジ」と呼ばれる岩タイプの技はトゲキッスには相性が悪い。これにより瀕死状態になってしまった。しかしサザンドラは攻撃の手を緩めるつもりはない。一度目を付けたポケモンは死ぬまで徹底的に潰す。そう言わんばかり両腕の口で電気をバチバチさせる。

「と、トゲェ～」

この時、トゲキッスは初めて思い知ったのだ。

格下であるドラゴンタイプを舐めてかかったらどうなるのかと…

あぁ…間違いなく殺される。

そう死ぬ覚悟を決めた次の瞬間

「あっ！いたいた！おーい、”ギドラ”」

「ラドォ～？　ドラァドラァ～♪」

白い悪魔をいとも容易く葬ったサザンドラは自身の主（マスター）であるエイジの方へ向かっていった。

その様子はさっきとは裏腹に主人に甘えるイーブイのようだ。しかしトゲキッスはより恐怖を感じてしまう。

あの”バケモノ”を手懐ける人間が一番恐ろしい!!!

「ったく、ギドラどこ行ってたんだよ～」
「ラドォ～」
「まぁ、見つかってよかったわ～、カレー作ったからみんなで食べようぜ」
「ドラァドラァ～♪」